

第7章 なぜリミタリアニズムか？

著者: イングリッド・ロベインズ (Ingrid Robeyns)

本論文は「リミタリアニズム」について論じる。その最も一般的な定式化において、リミタリアニズムとは、現在の世界において、誰も価値ある財、特に所得と富について、ある上限を超えて持つべきではないという考えである。リミタリアニズムは、規範的政治哲学に何を、もしあるとすれば何を付け加えるのか？

第1節では、リミタリアニズムが導入された文脈を説明する。第2節では、文献における最近の貢献と発展を含めて、リミタリアニズムについてより詳細に述べる。次の二つの節では、平等主義(第3節)と十分主義(第4節)について論じ、それらが私がリミタリアニズムの任務と想定していることを行えるかどうかを問う。第5節では、分配的正義の理論において、リミタリアニズムは多元主義的説明の一部として最もよく理解されると論じる。これは、十分主義、機会の平等主義、リミタリアニズムを組み合わせた多元主義的説明の提案をスケッチすることによって例示される。第6節では、すべてをまとめ、リミタリアニズムが規範的政治哲学に何を貢献するかという問いへの答えを示すことで結論とする¹。

1. リミタリアニズムの文脈

『持ちすぎること』(Having Too Much)において、私はリミタリアニズムを導入した。その最も一般的な定式化において、それは、現在の世界および最も近い可能世界において、誰も価値ある財の上限閾値以上を持つべきではないという考えである²。これらの価値ある財はさまざまな種類の希少財でありうるし、その分配はマクロまたはミクロレベルでの関心事でありうる。本論文では、私の焦点は個人が保有する金銭、特に所得と富に当てられる。

物質的不平等に関する著作の多くは、最も不利な立場にある人々の地位に焦点を当て、貧困者または不利な立場にある人々と貧困でない人々との区別を行っている。経済的リミタリアニズムは、この二層的分类を、(1)貧困または剥奪されている人々、(2)貧困ではないが、非常に裕福でもない人々、(3)非常に裕福な人々、という三層的区別に変える。これは、社会学における労働者階級、中産階級、上流階級という古典的区別の物質的基盤を反映している。このような三層的区別を行うことで、これら三つのグループのそれぞれに属する人々に我々が何を負っているか、また、それらのグループに属する人々が他者に何を負っているかを、貧困者と非貧困者のみの区別では不可能な仕方的分析することができる。特に、リミタリアニズムは、現在および近い可能世界において、富の大きな集中を保有することは全体的に有益な効果を持たないと主張するため、我々は道徳的に、一部の人々が持ちすぎている状況よりもリミタリアニズムを選好すべきである³。この転換の有益な効果はさまざまでありうる。他者の緊急のニーズを満たすことへの貢献、気候変動のための効果的な行動の資金調達などの集合行為問題への対処、民主的価値の保護などを含む⁴。

不平等と分配的正義に関する学際的研究に従事している政治哲学者にとって、所得と富の分布の上位層への焦点の移行は驚くべきことではないはずである。経済学者は、長い間、経済的不平等の上昇、特に富裕層への富の強い集中を記録してきた⁵。これらのデータは、ほぼすべての国で不平等が上昇していることを示している。なぜなら、非常に裕福な人々がさらに裕福になっているからである。リミタリアニズムという考えは、不平等一般だけでなく、特に富の集中に何か問題があるという議論への貢献である。リミタリアン主義者は、これは、富の集中の上昇の何が問題かを平等主義というより広い旗印の下で理解するよりも、リミタリアニズムという考えを別個に導入することによって最もよく捉えられると信じている⁶。その点において、それは貧困の撤廃への関心からの対称的な動きを含

んでいる。貧困の撤廃もまた、他の条件が等しければ、不平等を削減するだろう。貧困の撤廃についても、すべてが平等主義的関心に還元できるわけではない特定の理由が与えられてきた⁷。

リミタリアニズムに関する議論の一つの側面は、それがどのような種類の理論化を例示しているかという問題である。リミタリアニズムは「現在の世界」のために提案されてきた⁸。現在の世界には、飢餓、困窮、不利な状況が存在する。多くの人々が繁栄できない。我々の集合的注意を必要とする主要な集合行為問題、または危機に瀕している集合財(何よりもまず生物多様性と安定した気候)が存在する。そして、富の大きな保有は、その所有者が政治や政策決定に不均衡な影響を及ぼすこと、高度に汚染的な消費形態に従事すること、そして一部の国では市民権さえ購入することを可能にする⁹。

私は、このような不正義や不幸の事例が生じる現在および近い可能世界のためにリミタリアニズムを提案してきた。我々が異なる世界、すなわち社会的害がなく、すべての人が十全に繁栄しており、人間の介入によって対処できる不正義や不幸の事例がなく、金銭の集中がもはや腐敗や政治的影響力の購入を可能にしない世界に住んでいると仮定しよう。その至福の世界では、リミタリアニズムは資源の再分配を要求しないだろう¹⁰。同様に、リミタリアニズム(私が提案したもの)は、つながっていない世界に住む人々には適用されない。重要なのは、今ここで他者と比較した富の分配である。それは比較的概念である。重要なもう一つのことは、人々が何らかの仕方につながっているということである。それは関係的概念である¹¹。他者が何を持っているか、我々が置かれている全体的な事態とは独立に、それ自体における富の絶対的レベルが重要なのではない。したがって、核戦争の後、億万長者である一人を除いてすべての人が死んだ場合、リミタリアニズムはそれを不正義な状況とは判断しないだろう。リミタリアニズムは単に適用されないのである¹²。

したがって、リミタリアニズムは、少なくとも私が提案したものは、理論駆動型哲学(theory-driven philosophy)とは対照的に、問題駆動型哲学(problem-driven philosophy)への貢献として理解されるべきである¹³。私はここでこれらのラベルを導入する。それらが関連する区別を伝えるのに役立つ定式化であることを望むからである。しかし、政治哲学におけるこれら二つの広範な流れの間の区別は、長年にわたるものであり、政治哲学者に対して、彼らが主要な任務と考えるもの、そしてそれから派生して、彼らが使用する適切な方法と経験的研究に参与する際に取りうる態度について、異なる視点を提供していることを認識することが重要である¹⁴。

2. リミタリアニズムの再述と精緻化

リミタリアニズムは、以下のような主張として定式化できる:

経済的リミタリアニズム: 現在の世界および近い可能世界において、すべての人々は、彼らが十全に繁栄する生活を送るために必要な金銭的資源の上限閾値を超えて持つべきではない。

この定式化には、いくつかの重要な特徴がある:

A. 金銭的資源への焦点

リミタリアニズムは、金銭的資源、特に所得と富に焦点を当てている。これは、正義の測定基準(metric of justice)が何であるべきかという別の問題である。私は、ケイパビリティ・アプローチを支持している。すなわち、正義の測定基準は人々のケイパビリティであるべきだと考えている。しかし、リミタリアニズムが関心を持つのは、金銭的資源の分配である。なぜなら、現代社会において、金銭は他のケイパビリティを達成するための主要な手段だからである¹⁵。

B. 十全な繁栄の閾値

リミタリアニズムの中心的概念は、「十全に繁栄する(fully flourishing)」ために必要な資源のレベルである。この閾値は、人々が良い生活を送るために必要なすべてのケイパビリティを持つレベルであ

る。これは贅沢なレベルではなく、しかし最小限のレベルでもない。それは、人々が彼らの人生計画を追求し、価値ある目標を達成し、意味のある関係を持つことができるレベルである。

この閾値を正確に特定することは困難であり、文脈に依存する。しかし、概算として、私は以前、オランダのような高所得国では、この閾値は年収約10万ユーロ、または総資産約200万ユーロに相当すると示唆した¹⁶。これらの数字は、あくまで例示的なものであり、さらなる経験的研究と規範的議論を必要とする。

C. 現在の世界および近い可能世界への限定

リミタリアニズムは、理想理論(ideal theory)ではなく、非理想理論(non-ideal theory)の一部である。それは、現在の世界、すなわち不正義、困窮、集合行為問題が存在する世界のために提案されている。もし我々が非常に異なる世界、すなわちすべての人が繁栄し、不正義がなく、富の集中が害をもたらさない世界に住んでいたならば、リミタリアニズムは適用されないか、あるいは非常に異なる形態を取るだろう。

D. リミタリアニズムの根拠

リミタリアニズムを支持する理由は何か? 私は、二つの主要な論証を提案してきた:

1. 民主的論証: 富の大きな集中は、民主的平等と政治的平等を脅かす。超富裕層は、政治家への資金提供、ロビー活動、メディアの所有を通じて、不均衡な政治的影響力を行使することができる¹⁷。

2. 緊急ニーズ論証: 富の余剰は、他者の緊急で未充足のニーズを満たすために使用できる(そして使用するべき)である。飢餓、極度の貧困、基本的な医療へのアクセスの欠如などの問題が存在する世界では、余剰の富を持つことは道徳的に問題である¹⁸。

これらの論証に加えて、文献における他の著者も、リミタリアニズムを支持する追加の理由を提案している:

- **自律に基づく理由:** ダニエル・ズワルトウッドは、極端な富が自律を損なう可能性があるとして論じている¹⁹。
- **気候変動に関する理由:** コリン・ヒッキーらは、富の集中が高度に汚染的な消費を可能にし、気候変動への対処を妨げると論じている²⁰。
- **自尊心に基づく理由:** クリスティアン・ノイホイザーは、極端な富が社会における自尊心の条件を損なうと論じている²¹。

E. リミタリアニズムの実施

リミタリアニズムが正しいとすれば、それはどのように実施されるべきか? 最も明白な方法は、累進課税、特に高所得者に対する高い限界税率と富裕税である。しかし、他の政策手段も可能である:

- 高額相続税
- 企業における最高報酬の上限
- 政治献金の上限
- 高級品に対する高い消費税

リミタリアニズムの実施における重要な問題は、誰がこれらの政策を実施するのか、そして徴収された資金をどのように使用すべきかである。私の見解では、リミタリアニズムは主に国家レベルで実施されるべきであるが、国際協力も重要である。徴収された資金は、緊急ニーズの充足、公共財の提供、民主的制度の強化などに使用されるべきである²²。

3. 平等主義とリミタリアニズム

リミタリアニズムの批判者の中には、それが平等主義に還元可能であり、したがって独立した原理として必要ないと論じる者もいる。この節では、この反論を検討する。

A. 平等主義の種類

まず、「平等主義」が意味するものを明確にする必要がある。平等主義には多くの形態がある：

1. **単純平等主義(Simple egalitarianism)**: すべての人が同じ量の資源(または福祉、またはケイパビリティ)を持つべきである。
2. **優先主義(Prioritarianism)**: より不利な立場にある人々の福祉の改善に道徳的優先性を与えるべきである²³。
3. **関係的平等主義(Relational egalitarianism)**: 人々間の社会的関係が平等であるべきである。つまり、支配、階層、疎外がないべきである²⁴。
4. **機会の平等(Equality of opportunity)**: 人々は人生におけるさまざまな地位に到達する平等な機会を持つべきである²⁵。

B. リミタリアニズムと平等主義の違い

リミタリアニズムは、いくつかの点で平等主義と異なる：

1. **焦点の違い**: 平等主義は、不利な立場にある人々と有利な立場にある人々間の格差に焦点を当てる傾向がある。リミタリアニズムは、特に富裕層の保有に焦点を当てる。
2. **閾値の存在**: 平等主義(単純平等主義を除く)は、通常、下限閾値(十分性)に焦点を当てる。リミタリアニズムは上限閾値に焦点を当てる。
3. **正当化の違い**: 平等主義の主要な正当化は、平等それ自体の価値、または不平等の悪さである。リミタリアニズムの正当化は、富の集中の特定の害(民主主義への害、資源の浪費など)に基づいている。

C. 平等主義はリミタリアニズムの仕事を果たせるか？

ロバート・フーセビー(前章参照)は、リミタリアニズムが達成しようとすることは、平等主義によってより良く達成できると論じている。彼の主要な論点は：

- もし問題が富の不平等であるならば、平等主義的再分配の方がリミタリアン的上限よりも直接的な解決策である。
- もし問題が貧困者のニーズであるならば、十分主義の方がより直接的な解決策である。

この反論への私の応答は、以下の通りである：

応答1: 富の集中の特定の害: 平等主義は、不平等一般の問題を捉えるが、富の集中の特定の害を十分に捉えない。たとえば、超富裕層が政治に及ぼす影響は、単なる不平等の問題ではなく、富の絶対的レベルの問題でもある。100万ユーロを持つ人と200万ユーロを持つ人の間の不平等は、100万ユーロを持つ人と10億ユーロを持つ人の間の不平等とは質的に異なる²⁶。

応答2: 問題駆動型アプローチ: 理論駆動型哲学の観点からは、平等主義がリミタリアニズムの仕事を果たせるかもしれない。しかし、問題駆動型哲学の観点からは、リミタリアニズムは独自の貢献をする。それは、現実世界の特定の問題—富の集中—に直接焦点を当て、その問題に対する具体的な政策提案を提供する。

応答3: 政治的修辞: リミタリアニズムは、公共の議論において強力な修辞的機能を果たす。「誰も持ちすぎるべきではない」というメッセージは、単純で理解しやすく、政治的に動員力がある。これは、より抽象的な平等主義的議論よりも効果的である可能性がある²⁷。

D. 平等主義とリミタリアニズムの補完性

私の見解では、リミタリアニズムと平等主義は対立するのではなく、補完的である。分配的正義の完全な理論は、両方の要素を含むべきである:

- 平等主義は、不平等一般の問題と、人々間の平等な関係の重要性を捉える。
- リミタリアニズムは、富の集中の特定の害と、上限閾値の必要性を捉える。

多元主義的理論においては、両方の原理が役割を果たすことができる。これについては第5節で詳しく論じる。

4. 十分主義とリミタリアニズム

もう一つの反論は、リミタリアニズムが十分主義(sufficientarianism)に還元可能であるというものである。十分主義は、人々が「十分に(enough)」持つことが道徳的に重要であると主張する。この節では、十分主義とリミタリアニズムの関係を検討する。

A. 十分主義の種類

十分主義にもいくつかの形態がある:

- 1. 否定的十分主義(Negative sufficientarianism):** 十分性の閾値を下回ることは道徳的に悪いが、閾値を上回る分配については道徳的に中立である²⁸。
- 2. 肯定的十分主義(Positive sufficientarianism):** 十分性の閾値に到達することは道徳的に善い目標である²⁹。
- 3. 上限付き十分主義(Sufficientarianism with upper limits):** 十分性の閾値があり、またそれとは別の上限閾値もある。

B. リミタリアニズムは十分主義か?

一部の批判者は、リミタリアニズムは実際には「上限付き十分主義」の一形態であると論じている。つまり、それは二つの閾値を持つ十分主義である: 下限(十分性)と上限(過剰性)である。

この解釈には一定の真実がある。確かに、リミタリアニズムは上限閾値に関心を持つという点で、十分主義の一般的な構造を共有している。しかし、いくつかの重要な違いがある:

違い1: 焦点の違い: 十分主義は、主に下限閾値に焦点を当てる。つまり、人々が十分に持つことを確保することに関心がある。リミタリアニズムは、主に上限閾値に焦点を当てる。つまり、人々が持ちすぎないことを確保することに関心がある。

違い2: 正当化の違い: 十分主義の主要な正当化は、ニーズの充足または基本的ケイパビリティの保障である。リミタリアニズムの正当化は、富の集中の害(民主主義への害、資源の浪費など)である。

違い3: 政策的含意の違い: 十分主義は、主に再分配政策、社会保障、基本サービスへのアクセスなどを支持する。リミタリアニズムは、主に累進課税、富裕税、政治献金の規制などを支持する。

C. リミタリアニズムと十分主義の関係

私の見解では、リミタリアニズムと十分主義は、分配的正義の完全な理論において両方とも役割を果たすべきである。それらは異なる問題に対処している:

- 十分主義は、「すべての人が十分に持つことを確保するにはどうすればよいか?」という問いに答える。
- リミタリアニズムは、「富の過度の集中を防ぐにはどうすればよいか?」という問いに答える。

これら二つの問いは関連しているが、同一ではない。十分性を達成することは、富の集中の問題を自動的に解決するわけではない。逆に、富の集中を制限することは、十分性を自動的に達成するわけではない。両方の原理が必要である。

D. 「閾値疲労」への懸念

一部の批判者は、分配的正義の理論にあまりに多くの閾値を導入することは、理論を過度に複雑にし、実践的に扱いにくくすると懸念している。これは「閾値疲労(threshold fatigue)」と呼ばれることもある³⁰。

この懸念には一定のメリットがある。しかし、私の見解では、複数の閾値を持つことの複雑さは、単一の原理の過度の単純さよりも好ましい。現実世界の分配的正義の問題は複雑であり、我々の理論もある程度の複雑さを反映すべきである。

さらに、実際には、多くの政策立案者と市民はすでに複数の閾値の概念を使用している。たとえば、貧困線(下限)、中産階級のライフスタイルを維持するために必要な所得(中間点)、そして「富裕」または「超富裕」とみなされるレベル(上限)などである。リミタリアニズムは、既に暗黙のうちに使用されている区別を明示化するものである。

5. 多元主義的理論におけるリミタリアニズムの役割

これまで、リミタリアニズムと他の分配的正義の原理との関係を論じてきた。この節では、これらの洞察をまとめ、リミタリアニズムが多元主義的正義理論においてどのような役割を果たしうるかを示す。

A. 多元主義的正義理論

多元主義的正義理論は、分配的正義が単一の原理によってではなく、複数の原理の組み合わせによって最もよく捉えられると主張する。たとえば、ジョン・ロールズの正義論は、平等な基本的自由の原理、機会の公正な平等の原理、格差原理を組み合わせている³¹。

多元主義的アプローチの利点は、それが分配的正義の異なる側面を捉えることができることである。単一の原理は、すべての関連する考慮事項を捉えるには単純すぎる可能性がある。

B. 十分主義、機会の平等主義、リミタリアニズムの組み合わせ

私は、以下の三つの原理を組み合わせた多元主義的理論を提案したい:

- 1. 十分主義:** すべての人は、良い生活を送るために必要な基本的ケイパビリティの閾値に到達すべきである。
- 2. 機会の平等主義:** 閾値を上回る範囲では、人々は人生におけるさまざまな地位に到達する平等な機会を持つべきである。
- 3. リミタリアニズム:** 誰も十全に繁栄するために必要な資源の上限閾値を超えて持つべきではない。

これら三つの原理は、分配的正義の異なる側面を捉える:

- 十分主義は下限に焦点を当てる:誰も許容できないほど不利な立場にあるべきではない。

- 機会の平等主義は中間範囲に焦点を当てる:人々の成功は彼らの努力と才能によるべきであり、恣意的な要因(出生家族、人種、性別など)によるべきではない。
- リミタリアニズムは上限に焦点を当てる:誰も持ちすぎるべきではない。

C. 三原理の関係

これら三つの原理は、以下のように相互作用する:

優先順位: 私の見解では、十分主義が最も高い優先順位を持つべきである。つまり、すべての人が基本的ケイパビリティの閾値に到達することを確保することが、最も緊急の道徳的要求である。これが達成されれば、機会の平等主義とリミタリアニズムが適用される。

相互強化: これら三つの原理は相互に強化し合う。たとえば、リミタリアニズムを実施することによって得られる資源は、十分性を達成するために使用できる。また、機会の平等を確保することは、富の集中を制限するのに役立つ。

潜在的な緊張: これら三つの原理の間には、潜在的な緊張も存在する。たとえば、厳格な機会の平等主義は、才能のある人々が非常に高い所得を得ることを許容する可能性があり、これはリミタリアニズムと対立する。このような緊張をどのように解決するかは、さらなる議論を必要とする。

D. 多元主義の利点

この多元主義的アプローチには、いくつかの利点がある:

- 1. 包括性:** それは、分配的正義の異なる側面(下限、中間範囲、上限)をすべて捉える。
- 2. 柔軟性:** それは、異なる文脈において異なる原理に異なる重みを与えることを可能にする。
- 3. 現実主義:** それは、現実世界の複雑さを反映する。分配的正義の問題は、単一の原理によって解決できるほど単純ではない。
- 4. 政治的実行可能性:** それは、異なる政治的立場の人々にアピールする可能性がある。保守派は機会の平等主義を支持し、進歩派は十分主義とリミタリアニズムを支持する可能性がある。

6. リミタリアニズムは何を貢献できるか?

結論として、リミタリアニズムが規範的政治哲学に何を貢献するかという当初の問いに戻ろう。

A. 理論的貢献

- 1. 上限閾値への焦点:** リミタリアニズムの最も重要な理論的貢献は、分配的正義の議論に上限閾値の概念を導入したことである。従来の正義理論の多くは、下限(十分性)に焦点を当ててきた。リミタリアニズムは、上限も道徳的に重要であることを示す。
- 2. 富の集中の特定の害の強調:** リミタリアニズムは、富の集中が引き起こす特定の害、特に民主主義への害を強調する。これは、単なる不平等の問題とは区別される。
- 3. 多元主義的理論の発展:** リミタリアニズムは、十分主義や平等主義と組み合わせることで、より包括的な多元主義的正義理論の発展に貢献する。

B. 実践的貢献

- 1. 政策提案:** リミタリアニズムは、具体的な政策提案を提供する。累進課税、富裕税、政治献金の規制などである。
- 2. 公共の議論の枠組み:** リミタリアニズムは、富と不平等に関する公共の議論のための有用な枠組みを提供する。「誰も持ちすぎるべきではない」というメッセージは、単純で理解しやすい。

3. 政治的動員: リミタリアニズムは、富の集中に反対する政治的動員のための強力なスローガンを提供する可能性がある。

C. 方法論的貢献

1. 問題駆動型哲学の例: リミタリアニズムは、問題駆動型哲学のアプローチの例である。それは、現実世界の特定の問題(富の集中)から始まり、その問題に対処するための規範的原理を発展させる。

2. 学際的研究の促進: リミタリアニズムの発展は、哲学、経済学、政治学、社会学の間の学際的対話を促進してきた。これは、分配的正義の研究にとって有益である。

D. 限界と課題

リミタリアニズムには、認識すべき限界と課題もある:

1. 閾値の特定の困難: 「十全に繁栄する」ために必要な資源のレベルを正確に特定することは困難である。これは、さらなる経験的研究と規範的議論を必要とする。

2. 実施の困難: リミタリアニズムの実施は、政治的に困難である。富裕層は強力な政治的影響力を持ち、リミタリアンの政策に抵抗する可能性が高い。

3. グローバルな調整の必要性: 国家レベルでのリミタリアニズムの実施は、富裕層が他国に移動する可能性があるため、限定的な効果しか持たない可能性がある。効果的な実施には、国際的な調整が必要である。

4. 意図しない結果: リミタリアンの政策は、意図しない否定的な結果を持つ可能性がある。たとえば、起業や投資のインセンティブを低下させる、または富裕層に脱税や資産隠しのインセンティブを与える可能性がある。

E. 結論

これらの限界にもかかわらず、私は、リミタリアニズムが規範的政治哲学に重要な貢献をすると結論する。それは、従来の正義理論が十分に対処してこなかった問題—富の集中とその害—to 焦点を当てる。それは、この問題に対処するための具体的な規範的原理と政策提案を提供する。そして、それは、分配的正義に関するより包括的な多元主義的理論の一部として理解されるべきである。

最終的に、リミタリアニズムの価値は、それが独立した完全な正義理論であるかどうかではなく、現実世界の重要な問題に対処するのに役立つかどうかである。その観点から、私は、リミタリアニズムが重要な貢献をすると信じている。

「なぜリミタリアニズムか?」という問いへの答えは、したがって:富の集中の問題に直接焦点を当て、その特定の害を強調し、それに対処するための具体的な政策を提案する規範的原理が必要だからである。リミタリアニズムは、この役割を果たすことができる。

参考文献

Alvaredo, Facundo, et al. 2013. The Top 1 Percent in International and Historical Perspective. *Journal of Economic Perspectives*, 27(3), 3–20. <https://doi.org/10.1257/jep.27.3.3>

Anderson, Elizabeth. 1999. What is the Point of Equality? *Ethics*, 109, 287–337. <https://doi.org/10.1086/233897>

Atkinson, Anthony B. and Thomas Piketty (eds). 2007. *Top Incomes over the Twentieth Century: A Contrast Between Continental European and English-Speaking Countries* (Oxford: Oxford University Press). <https://doi.org/10.1093/acprof:oso/9780199286881.001.0001>

- Axelsen, David V. and Lasse Nielsen. 2021. Richness: A Critique. *Journal of Applied Philosophy*, 38, 341–356. <https://doi.org/10.1111/japp.12457>
- Christiano, Thomas. 2012. Money and Politics. In David Estlund (ed.), *The Oxford Handbook of Political Philosophy* (Oxford: Oxford University Press), 241–257.
- Crisp, Roger. 2003. Equality, Priority, and Compassion. *Ethics*, 113, 745–763. <https://doi.org/10.1086/373954>
- Frankfurt, Harry. 1987. Equality as a Moral Ideal. *Ethics*, 98, 21–43. <https://doi.org/10.1086/292913>
- Herlitz, Anders. 2019. Nondiscrimination, Priority, and Sufficiency. *Politics, Philosophy & Economics*, 18, 50–67. <https://doi.org/10.1177/1470594X18811193>
- Huseby, Robert. 2022. The Limits of Limitarianism. *The Philosophical Quarterly*. [この巻の第6章]
- Neuhäuser, Christian. 2018. *Reichtum als moralisches Problem* (Berlin: Suhrkamp).
- Parfit, Derek. 1997. Equality and Priority. *Ratio*, 10, 202–221. <https://doi.org/10.1111/1467-9329.00041>
- Piketty, Thomas. 2014. *Capital in the Twenty-First Century* (Cambridge, MA: Harvard University Press). <https://doi.org/10.4159/9780674369542>
- Rawls, John. 1971. *A Theory of Justice* (Cambridge, MA: Harvard University Press).
- Robeyns, Ingrid. 2017. *Wellbeing, Freedom and Social Justice: The Capability Approach Re-Examined* (Cambridge: Open Book Publishers). <https://doi.org/10.11647/OBP.0130>
- Roemer, John E. 1998. *Equality of Opportunity* (Cambridge, MA: Harvard University Press). <https://doi.org/10.4159/9780674042872>
- Scheffler, Samuel. 2003. What is Egalitarianism? *Philosophy and Public Affairs*, 31, 5–39. <https://doi.org/10.1111/j.1088-4963.2003.00005.x>
- Timmer, Dick. 2021a. Thresholds, Inequality and Sufficiency. *Journal of Applied Philosophy*, 38, 760–773. <https://doi.org/10.1111/japp.12502>
- Timmer, Dick. 2021b. Limitarianism: Pattern, Principle, or Presumption? *Journal of Applied Philosophy*, 38, 760–773. <https://doi.org/10.1111/japp.12502>
- Valentini, Laura. 2012. Ideal vs. Non-ideal Theory: A Conceptual Map. *Philosophy Compass*, 7, 654–664. <https://doi.org/10.1111/j.1747-9991.2012.00500.x>
- Wolff, Jonathan. 2008. Philosophy, the Public Sphere and Public Policy. *Theoria*, 55, 1–6.
- Wolff, Jonathan. 2018. Methods in Philosophy and Public Policy: Applied Philosophy versus Engaged Philosophy. In Annabel Lever & Andrei Poama (eds.), *Routledge Handbook of Ethics and Public Policy* (pp. 13–24). London: Routledge. <https://doi.org/10.4324/9781315461731-2>
- Zwarthoed, Danielle. 2019. Autonomy-Based Reasons for Limitarianism. *Ethical Theory and Moral Practice*, 21, 1181–1204. <https://doi.org/10.1007/s10677-018-9958-7>

- 原文: Ingrid Robeyns, "Why Limitarianism?" in *Having Too Much*, ed. Ingrid Robeyns (Cambridge: Open Book Publishers, 2023), 175-201.

- 翻訳: Claude (Anthropic)

- 翻訳日: 2025年11月20日

1. 紙幅と焦点の理由から、本論文ではリミタリアニズムに関連する他の懸念については論じない。たとえば、リミタリアニズムはすべての閾値理論に向けられる批判の対象となる。Timmer 2021a 参照。また、Timmer (2021b) が行った論証に特に言及する Huseby (2022) によるリミタリアニズム批判にも関与しない。↵

2. Robeyns 2017. ↵

3. 余剰の金銭を持つ主体の中には、国家よりも多くの善を行える者もいるので、彼らはそれを保持すべきだという反論があるかもしれない。しかし、リミタリアニズムは、人が保持する個人的富に関するものであって、慈善団体や企業に移転した富に関するものではないため、そうした善を行える可能性のある組織への移転については、この選択肢を除外する。しかし、これは、リミタリアニズムが個人的富と、組織や企業の一部として誰かが持つ富との間にどのように明確な線を引くかという問題を提起する。これは今後の研究で取り上げなければならない。この反論を強く主張してくれた Robert Huseby に感謝する。↵

4. したがって、リミタリアニズムは、すべての余剰金銭が有益な効果なしに排除される事態への移行を支持しない。余剰金銭それ自体が問題なのではなく、したがってそれ自体として排除されるべきではない。それは毒や汚染のような悪ではない。むしろ、余剰金銭は有害である(例えば民主主義への影響のため)か、超富裕層によるその所有が浪費的であり、したがってその再配分は事態をより良くするのである。↵

5. 例えば、Atkinson and Piketty 2007; Alvaredo et al. 2013; Piketty 2014 参照。↵

6. Neuhäuser (2018) と Axelsen and Nielsen (2021) は、極端な富が問題である理由について、単に経済的不平等を懸念する標準的な理由では捉えられない仕方を含めて、さまざまな議論を提示している。↵

7. 例えば Herlitz 2019. ↵

8. Robeyns 2017, p. 3. ↵

9. たとえば、Deutsche Welle は、2013年にマルタが65万ユーロでパスポートを販売したと報じている。<https://www.dw.com/en/european-citizenship-sold-to-the-super-wealthy/a-16756198> 参照。↵

10. おそらく、そのような世界では異なる形態のリミタリアニズムが適用されるかもしれない。たとえば、富の平均保有量のパーセンテージである上限を持つことや、金銭的資源ではなく他の正義の測定基準におけるリミタリアニズムなどである。これらはさらなる探求を必要とする選択肢である。↵

11. ただし、関係的側面は非常に最小限でありうる。たとえば、すべてが依存する惑星を共有していることや、共有された歴史を持つことなどである。完全に非関係的なリミタリアニズムがもっともらしいかどうかは、本論文の範囲外の問題である。↵

12. 通信でこの問題を提起してくれた Martin Peterson に感謝する。↵

13. リミタリアニズムが導入された時点で、私はそれを非理想的政治哲学への貢献として言及した。
私が現在理解しているように、理論駆動型対問題駆動型の区別と、理想的対非理想的の区別の間には重複がある。後者はいくつかの異なる仕方で理解できる(例えば Valentini 2012 参照)。そのうちの(機能的)理論対問題駆動型の区別は、私が提案したい区別に最も近い。↵
14. この区別は、ジョナサン・ウルフ(2008, 2018)が「応用哲学(applied philosophy)」と「関与哲学(engaged philosophy)」の区別と呼ぶものに非常に近い。彼は前者を「応用倫理学者は、独立して決定された道徳的立場を持ち、それを実際の例に適用しようとする」と記述し、後者を「実践的な結論に到達するために、規範的な洞察を経験的に知らされたさまざまな代替案と組み合わせようとする」と記述する(Wolff 2018, 15)。両者の違いは、適用哲学では問題が理論的洞察によって解決されると見なされるのに対し、関与哲学では問題が理論と経験的洞察の両方によって共同で解決されると見なされることである。↵
15. この点については Robeyns 2017, chap. 4 でより詳しく論じている。↵
16. Robeyns 2017, pp. 4, 16. これらの数字は、2017年の価格で計算されている。↵
17. この論証は Thomas Christiano (2012) の研究に基づいている。↵
18. Robeyns 2017, pp. 9-12. ↵
19. Zwarthoed 2019. ↵
20. Hickey (この巻の第12章)。↵
21. Neuhäuser (この巻の第11章)。↵
22. これらの問題についてのより詳細な議論については、Robeyns 2017, chap. 6 参照。↵
23. Parfit 1997. ↵
24. Anderson 1999; Scheffler 2003. ↵
25. Roemer 1998. ↵
26. Neuhäuser 2018 も類似の論点を展開している。↵
27. ただし、第6節で論じるように、これは両刃の剣である可能性がある。↵
28. Frankfurt 1987. ↵
29. Crisp 2003. ↵
30. Huseby 2022. ↵
31. Rawls 1971. ↵